

イシイルカ 太平洋・日本海・オホーツク海

(Dall's Porpoise, *Phocoenoides dalli*)



イシイルカ型イシイルカ（左）とリクゼンイルカ型イシイルカ（右）（撮影：宮下富夫）
白斑部の長さの割合が異なることが明瞭に見取れる。両型の分布域の境界付近ではこのように混じった群れが見られることもある。なお、本文中では、以後イシイルカ型及びリクゼンイルカ型と呼ぶ。

最近一年間の動き

2011年3月11日の東日本大震災で主要な水揚げ港がある三陸沿岸が被害を受けたため、以後操業ができない状況にあった。その後、2012年の春から操業が再開され、久慈と山田に水揚げがあり、かつての主要な水揚げ港であった大槌でも同年冬から水揚げが再開された。

利用・用途

小型歯鯨類のうちのいわゆるいるか類には、水族館等の展示用の生体として販売されるものがあるが、本種は飼育例も少なく、また、突極漁業は生体を捕獲できる漁法ではないため、食用として捕獲されている。筋肉と脂皮が刺身用、煮物用、加工用などに利用される。かつては飼料に用いられたこともあったが、現在ヒトの食用以外の利用は確認されていない。

漁業の概要

本種は、第二次大戦前から三陸の突きん棒によって捕獲されている。1970年代までは冬季に三陸沖で日帰り操業するのが主であったが、1980年頃に他県海域に遠出する船が現れ、1985年頃から北海道海域での操業が本格化した（粕谷・宮下 1989）。

現在は上述のように2011年の東日本大震災の影響で水揚げ港は限られている。かつては岩手県、北海道、宮城県及び青森県の漁船（20トン未満）が操業しているが、岩手県船の捕獲頭数が全体の約9割を占めていた。岩手県船の操業パターンは、11～4月に三陸の地先海域で日帰り操業し、5月半ばから6月末まで北海道の日本海沿岸、9～10月に北海道のオホーツク海沿岸あるいは道東太平洋沿岸の港を基地に日帰り操業（沖泊まりはしない）を行うものである。イシイルカ漁業者の多くは、時期と海域によってカジキ漁やイサダ漁なども行う兼業者である。

本種は1993年に捕獲枠が設定された。漁場と系群は三陸沿岸においてはほとんどがリクゼンイルカ型でわずかにイシイルカ型が混在し、北海道沿岸ではほぼ全数イシイルカ型で

ある。

この漁業は岩手県においては1989年に知事許可漁業となった。また、省令改正により、2002年4月までには他道県においても海区漁業調整委員会による承認漁業から知事許可漁業に移行した。

農林水産省の統計によれば、大型捕鯨業がモロトリアムに入る前（1987年以前）は年間20,000頭以下の捕獲頭数であったが、モロトリアム以降は鯨肉の流通不足を補うためか、1988年に捕獲頭数が40,000頭以上へと急増した（図1）。この年までの統計では、イシイルカ型とリクゼンイルカ型が区別されていない。捕獲頭数の推移は暦年で示したが、捕獲枠は8月から翌年7月までの1年を単位として管理されているため、見かけ上は捕獲枠を超えている年もある。また、探索は人の視力に依存しているため、捕獲動向は天候・海況に左右される。なお、捕獲統計のうち北海道沿岸における道内船の漁獲物の一部は洋上で製品に処理してから水揚げされている。こうした漁獲物については正肉50キログラムをイシイルカ型1頭として換算してある（端数切り上げ）。東日本大震災のあった2011年は、大震災以後捕獲がなかったため、水揚げ頭数はイシイルカ型が89頭、リクゼンイルカ型が1,863頭にとどまった。

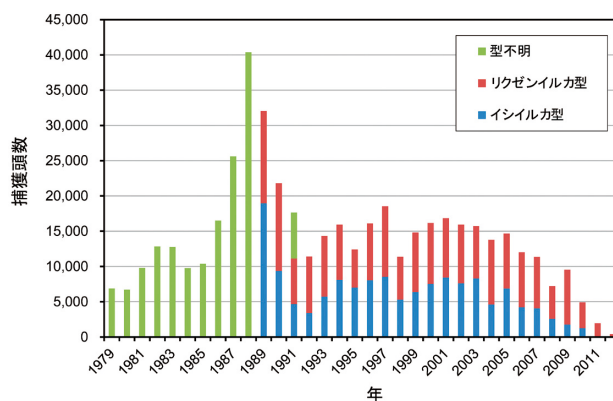


図1. イシイルカ捕獲頭数の推移（1979～2012年）
（水産庁国際課集計）

生物学的特性

本種は北太平洋及びその隣接海域の固有種である。体側の白斑が背鰭近くから尾側に伸びるのがイシイルカ型で（図2）、胸鰭基部から始まるのがリクゼンイルカ型である（図3）。稀に全身黒い黒化型や、その逆の白化型が見られる。分布域内を冬季に南下、夏季に北上する。本種は大きな群れは作らず、群れ構成頭数は概ね10頭以下である。

繁殖は季節に限られており、晩春から夏に出産する（1産1仔）。冬季には成熟雄の精巣に精子が見られず、また成熟雌の排卵もほぼ夏季に限られる。妊娠期間は1年弱である。両型ともに体長85～100cmで生まれる。イシイルカ型の雄は4～5歳、体長190cm前半、雌は3～4歳、体長180cm後半で性成熟に達する。リクゼンイルカ型の雄は5～6歳、体長190cm後半、雌は3～4歳、体長180cm後半で性成熟に達する。成熟雌は1～2年に1回出産し、授乳期間は1～2か月と考えられている。雌は出産後約1か月で交尾できる。したがって、授乳中に受胎することも稀ではない。親子連れにもう1頭の個体が加わって遊泳する例が観察されるが、交尾の機会をうかがう成熟雄であると推察できる。



図2. イシイルカ型イシイルカの体側面（笠松・宮下・富岡（2009）より）



図3. リクゼンイルカ型イシイルカの体側面（笠松・宮下・富岡（2009）より）

寿命は15～20歳と言われている（Kasuya 1978, Kasuya and Shiraga 1985, 仲松 2000）。しかし本種の場合、歯が極端に小さいため、高齢個体の年齢査定が非常に困難であり、厳密には未解明である。両型の成長様式は、図4、図5のように推定されている（Kasuya 1978, 仲松 2000）。

本種の系群は、夏季に親子連れが発見される海域の分離の様子から8系群と数えられる（図6；吉岡・粕谷 1991）。そのうち7系群はイシイルカ型の体色型である。日本の漁業に捕獲されるイシイルカ型系群のほとんどは、オホーツク海南西部で繁殖する日本海－オホーツク海系群である。この系群は、冬季には兵庫県沖まで南下し、夏季には日本海を北上して繁殖海域に入るほか、道東の太平洋沿岸域にも現れる。一方、リクゼンイルカ型の系群はオホーツク海中部を繁殖海域とする。冬季には三陸沿岸まで南下し、秋には道東太平洋沖合に分布する。道東太平洋においては両体色型が見られるが、

混群を作ることは稀であり、上述のように沿岸と沖合に分布海域を分け合っている（岩崎・宮下 1992）（図7）。

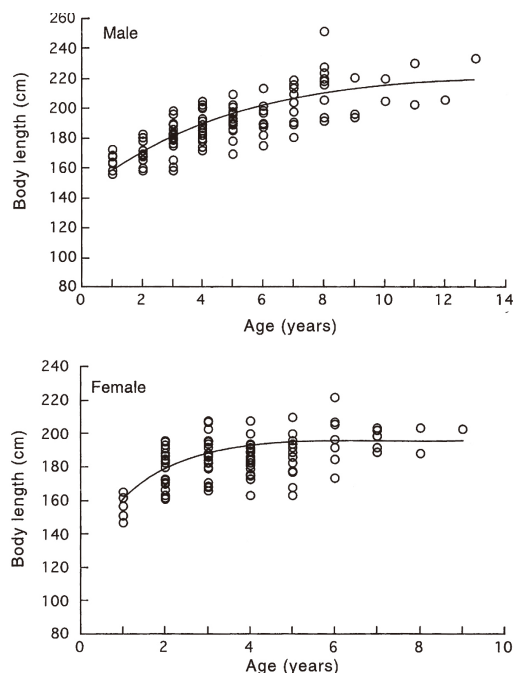


図4. イシイルカ型イシイルカの成長曲線（上：雄、下：雌）（仲松 2000）

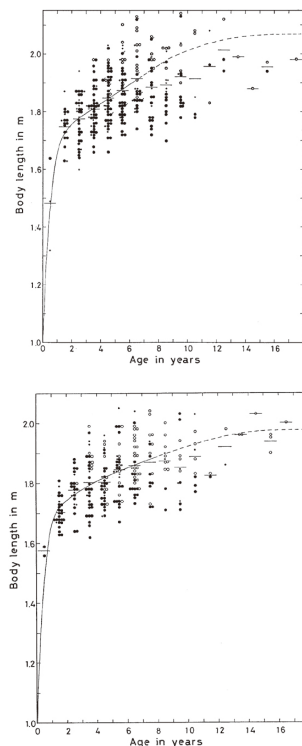


図5. リクゼンイルカ型イシイルカの成長曲線（上：雄、下：雌）（Kasuya 1978）

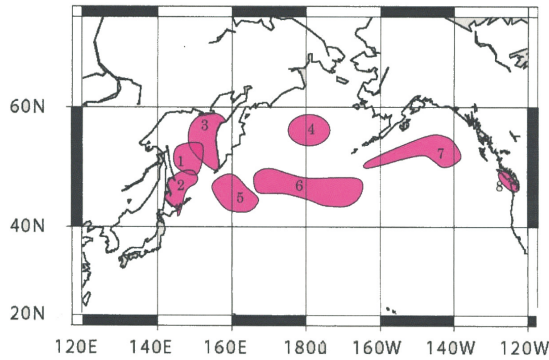


図 6. 北太平洋のイシイルカの分布 (吉岡・粕谷 1991 を改変) (繁殖海域に基づくイシイルカの 8 系群を示す。1 はリクゼンイルカ型系群、2 はイシイルカ型の日本海-オホーツク海系群、3 ~ 8 はイシイルカ型他系群の各繁殖海域。

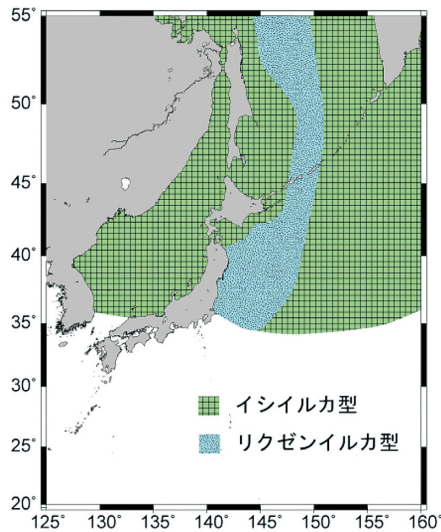


図 7. 我が国周辺のイシイルカの分布 (吉岡 1996)

ミトコンドリア DNA の塩基配列を分析すると、両体色型間には差異が見られた。両者間では体色型も明確に異なるため、別個の系群として管理するのが妥当である。DNA 塩基配列を比較したところ、日本海-オホーツク海系群のイシイルカ型と東方の太平洋沖合のイシイルカ型系群との間にも差が認められた (吉田 2002, Hayano *et al.* 2003)。冬季に三陸沖で捕獲される個体には 5% ほどイシイルカ型が含まれる。体色型の比較により、これらは太平洋沖合のイシイルカ系群に属するものと考えられている (Amano *et al.* 1996)。このことから、冬季に三陸沖には北太平洋沖合からイシイルカ系群が流入することが示唆される。

イシイルカ型は、北海道の日本海沿岸では 1980 年代には主にマイワシを捕食していた。しかし、1990 年代には日本海系マイワシ資源の崩壊により、スケトウダラを捕食するようになった。スケトウダラにも資源減少の傾向が見られるため、本種による捕食がそれに追い討ちをかけている可能性がある。一方、三陸沖つまりリクゼンイルカ型は、ハダカイワシ類を主に捕食しており、この傾向には変化が見られない (大泉 2002)。なお、本種の捕食者としてはシャチが挙げられる (洋上での観察例やシャチの胃内容から本種が報告されている)。

資源状態

イシイルカ型は 1980 年頃から開発された資源と考えられるが、リクゼンイルカ型は漁獲の歴史が長い。いずれも危急の状態とは判断されていないが、現在は各種調査データを検討している状況にある。

オホーツク海を含む海域で 2003 年夏季に実施した目視調査を基に、イシイルカ型 173,638 頭 (変動係数 0.212)、リクゼンイルカ型 178,157 頭 (変動係数 0.232) と推定された (宮下ほか 2007)。今後適切な時期に新たな資源量推定値を得るには、夏季にオホーツク海のロシア 200 海里水域に入域できること、同時に実施するミンクジラ目視調査と調査設計上両立させることが鍵となる (宮下 2002)。2009 年及び 2010 年の夏季に同海域においてミンクジラを主対象とした目視調査が実施されたが、ロシアによる入域制限海域が広く、イシイルカ及びミンクジラの資源量推定がは限定的なものとなった。

資源水準については、調査海域の制限及び操業形態等の変化があり、調査継続中である。近年は捕獲頭数が変動あるいは減少しているが、上記経済的な理由や大震災の影響もあり、資源動向は依然横ばいと考えられる。

管理方策

鯨類の再生産率は 1 ~ 4% と経験的に考えられている。前述のように出産間隔から本種の再生産率が高い方 (3 ~ 4%) であることがうかがえる。資源量と再生産率に捕獲実績等を加味して 1993 年に水産庁が捕獲枠を設定した。これは沿岸の漁業資源の一部に生物学的許容漁獲量 (ABC) が導入されたのに先んじている。捕獲枠は体色型別、道県別に配分されており (表 1)、各道県は ABC に準じた資源管理責任を有すると言えよう。

現状においても本種は漁期、海域、捕獲枠を含む許可制によって管理されている。しかし、合理的かつ科学的な資源管理をさらに推し進めるためには、本種の生態・資源量、漁業の特性などを考慮した資源管理モデルの構築が求められている (岡村 2002)。水産庁は 2007 年に本種の管理に PBR (Potential Biological Removal; Wade 1998) の概念を導入して、捕獲枠設定を行っている。

表 1. 型別・道県別捕獲枠 (単位: 頭数) (水産庁)

体色型	道県	2010年度	2011年度	2012年度
イシイルカ型 イシイルカ	北海道	1,296	1,244	1,192
	青森県	12	10	8
	岩手県	6,224	5,975	5,726
リクゼンイルカ型 イシイルカ	宮城県	241	231	221
	北海道	89	86	83
	岩手県	7,308	7,060	6,811
	宮城県	241	231	221

執筆者

鯨類ユニット
国際水産資源研究所 外洋資源部
宮下 富夫

参考文献

Amano, M. and Miyazaki, N. 1996. Geographic variation in external morphology of Dall's porpoise, *Phocoenoides dalli*. *Aquat. Mamm.* 22: 167-174.

Hayano, A., Amano, M. and Miyazaki, N. 2003. Phylogeography and population structure of the Dall's porpoise, *Phocoenoides dalli*, in Japanese waters revealed by mitochondrial DNA. *Genes Genet. Syst.* 78:81-91.

Houck, W. J. and Jefferson T. A. 1999. Dall's porpoise *Phocoenoides dalli* (True, 1885). In Ridgway, S. H. and Harrison, R. (eds.), *Handbook of Marine Mammals volume 6: The second book of dolphins and the porpoises.* Academic Press. 443-472 pp.

岩崎俊秀・宮下富夫. 1992. 三陸・道東海域におけるイシイルカの夏季の体色型別棲み分け. 平成 4 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. p.108.

岩崎俊秀・木白俊哉・加藤秀弘. 2001. 小型鯨類の管理. In 加藤秀弘・大隅清治編, 鯨類資源の持続的利用は可能か. 生物研究社, 東京. 54-63 pp.

笠松不二男・宮下富夫・吉岡基. 2009. 新版 鯨とイルカのフィールドガイド. 東京大学出版会. 149pp.

Kasuya, T. 1978. The life history of Dall's porpoise with special reference to the stock off the Pacific coast of Japan. *Sci. Rep. Whales. Res. Inst.* 30: 1-63.

Kasuya, T and Shiraga, S. 1985. Growth of Dall's porpoise in the western North Pacific and suggested geographical growth differentiation. *Sci. Rep. Whales Res. Inst.* 36: 139-152.

粕谷俊雄・宮下富夫. 1989. 日本のイルカ漁業の資源管理と問題点. 採集と飼育, 51: 154-160.

Miyashita, T. 1991. Stocks and abundance of Dall's porpoises in the Okhotsk Sea and adjacent waters. 第 43 回国際捕鯨委員会科学委員会提出論文 (SC/43/SM7). 24 pp.

宮下富夫. 2002. 2. イシイルカの資源は今 - 目視調査船による資源量調査結果. In 遠洋水産研究所 (編), 平成 14 年度国際資源調査等推進対策事業岩手県イシイルカ調査報告会抄録. イシイルカの資源と生態. 遠洋水産研究所, 静岡. 7-10 pp.

宮下富夫・岩崎俊秀・諸貫秀樹. 2007. 北西太平洋におけるイシイルカの資源量推定. 平成 19 年度日本水産学会秋季大会講演要旨集. p.164.

仲松 謙. 2000. 日本近海に棲息するイシイルカ *Phocoenoides dalli* (True, 1885) の生活史と回遊に関する研究. 三重大学大学院修士論文. iv+29 pp +7 tabs+28figs.

大泉 宏. 2002. 3. イシイルカの生物学. 3-3. イシイルカの食性 - 胃内容物分析から. In 遠洋水産研究所 (編), 平成 14

年度国際資源調査等推進対策事業岩手県イシイルカ調査報告会抄録. イシイルカの資源と生態. 遠洋水産研究所, 静岡. 18-21 pp.

岡村 寛. 2002. 4. イシイルカの科学的管理に向けて - 資源管理モデルの分析. In 遠洋水産研究所 (編), 平成 14 年度国際資源調査等推進対策事業岩手県イシイルカ調査報告会抄録. イシイルカの資源と生態. 遠洋水産研究所, 静岡. 22-26 pp.

Wade, P.R. 1998. Calculating limits to the allowable human-caused mortality of cetaceans and pinnipeds. *Mar. Mam. Sci.*, 14(1):1-37.

吉岡 基・粕谷俊雄. 1991. 生態分布解析による鯨類の系群判別 - イシイルカとコビレゴンドウを中心に. In 桜本和美・加藤秀弘・田中昌一 (編), 鯨類資源の研究と管理. 恒星社厚生閣, 東京. 53-63 pp.

吉岡 基. 1996. イシイルカ. In 日高敏隆 (監修), 日本動物大百科. 2. 哺乳類 II. 平凡社, 東京. 86-87 pp.

吉田英可. 2002. 3. イシイルカの生物学. 3-2. 三陸沖と他海域の交流 - 遺伝性科学による系群分析. In 遠洋水産研究所 (編), 平成 14 年度国際資源調査等推進対策事業岩手県イシイルカ調査報告会抄録. イシイルカの資源と生態. 遠洋水産研究所, 静岡. 10-12 pp.

イシイルカ (太平洋・日本海・オホーツク海) 資源の現況 (要約表)

資源水準	調査中
資源動向	横ばい
世界の捕獲量 (最近 5 年間)	-
我が国の捕獲量 (最近 5 年間)	0.04 ~ 1.2 万頭 平均: 0.5 万頭 (2008 ~ 2012 年)
管理目標	現在の資源水準の維持
資源の状況	イシイルカ型イシイルカ系群: 17.4 万頭 (CV=0.212, 2003 年) リクゼンイルカ型イシイルカ系群: 17.8 万頭 (CV=0.232, 2003 年)
管理措置	操業海域の道県知事による許可制 (体色型別捕獲枠、年間 5 ~ 6 か月の漁期、捕獲統計)
管理機関・関係機関	水産庁、漁業道県

付表 1. イシイルカの捕獲頭数 (1979～2012 年)
(水産庁国際課集計)

西暦年	イシイルカ型クゼンイルカ	型不明	
1979	-	6,872	
1980	-	6,718	
1981	-	9,803	
1982	-	12,833	
1983	-	12,776	
1984	-	9,764	
1985	-	10,378	
1986	-	16,515	
1987	-	25,600	
1988	-	40,367	
1989	18,953	13,095	-
1990	9,360	12,442	-
1991	4,671	6,457	6,506
1992	3,394	8,009	-
1993	5,731	8,587	-
1994	8,093	7,854	-
1995	7,002	5,394	-
1996	8,038	8,062	-
1997	8,533	10,007	-
1998	5,303	6,082	-
1999	6,379	8,428	-
2000	7,513	8,658	-
2001	8,430	8,422	-
2002	7,614	8,335	-
2003	8,308	7,412	-
2004	4,614	9,175	-
2005	6,880	7,784	-
2006	4,212	7,802	-
2007	4,070	7,287	-
2008	2,594	4,632	-
2009	1,773	7,767	-
2010	1,256	3,663	-
2011	89	1,863	-
2012	29	376	-